

6_伊東忠太の住宅観と「荻外荘」

■ 伊東忠太の住宅観に関する先行研究

①家庭博覧会（大正4年）『理想の家庭』における「住宅」（中流住宅）の説明

→内田青蔵監修『近代日本生活文化基本文献集 別冊』日本図書センター、2012
における内田青蔵『理想の家庭』の解題(p.62)で伊東忠太の「中流住宅」に関する論考を紹介し、住宅改良運動や生活改善同盟会の活動との関連性を指摘している。

②『婦人之友』大正5年8月号に掲載された設計論「中流の住宅は如何に設計すべきか」

→青木正夫・岡俊江・鈴木義弘『中廊下の住宅』住まいの図書出版局、2009
における「中廊下型住宅批判」の項目(pp.68-74)にて伊東忠太の雑誌記事を紹介し、接客空間を廃止せずに位置を変更する点とプライバシー確保に着目している。

雑誌記事：

伊東忠太「中流の住宅は如何に設計すべきか」（『婦人之友』大正5年8月）

執筆者不明「伊東工学博士の新築住宅」（『婦人之友』大正5年8月）

6_伊東忠太の住宅観と「荻外荘」

■ 伊東忠太の住宅観 ①

家庭博覧会（大正4年）『理想の家庭』における「住宅」（中流住宅）の説明

I_家庭と家室：「完全なる家庭を作る条件は完全な住宅を作るにあり
といってもいいくらい、家庭は家屋と離して考えることはできない」

II_現在の家屋：現在の住宅は「実に情けない有様」。

III_「所謂」家屋改良：「根本的条件であるところの
「プランニング（各部布置結構）」までに考えが及んでいない」

IV_旧式家屋の欠点：

イ_全体として根本的に家庭の意味を了解していない。

具体的項目：縁側や雨戸多、客間中心、暗い主婦や子供の部屋での雑居

ロ_用材選択の誤謬：「間取がよく」、「空気の流通」、「光線の具合」が、
よく取れ住むに「快適かつ堅牢強固」であることが「良建築」の条件

ハ_間取の研究不徹底：ある部屋に行くために他の部屋を通過しなければなら
ない状況。

青字語句：内田青蔵による引用語句

黒字語句：引用されていない部分


6_伊東忠太の住宅観と「荻外荘」

V_改良の方針：各家庭について、「家族の多寡」「生活の程度」「地面の広狭」「各自の趣味当の参酌」が大切。

イ_居間：「これからは家中で一番よい室はこれを家族常住の間と定め」る。

ロ_縁側、廊下：「縁側なくしてしかも各室の連絡を完全に容易に造り上げる」のが手腕。

ハ_台所：居間に次いで「万事好都合な地位を占めるべき」もの。

ニ_壁を増し、建具を減ず：「型に四個の室が続いている場合」(中略)


「二間に襖を四枚用いるよりは、左右三尺づつを壁にして中部の一間を襖にするような方針を採りたい」なぜなら「家屋が堅牢」かつ「本箱や筆筒等の置き場」を確保できる

ホ_書斎及び応接間：「半西洋式すなわち椅子、テーブルを用いる方が便利」

ヘ_子供室：「身体発育という考えや将来の生活に対する練習として椅子式テーブル式にしてやりたい」

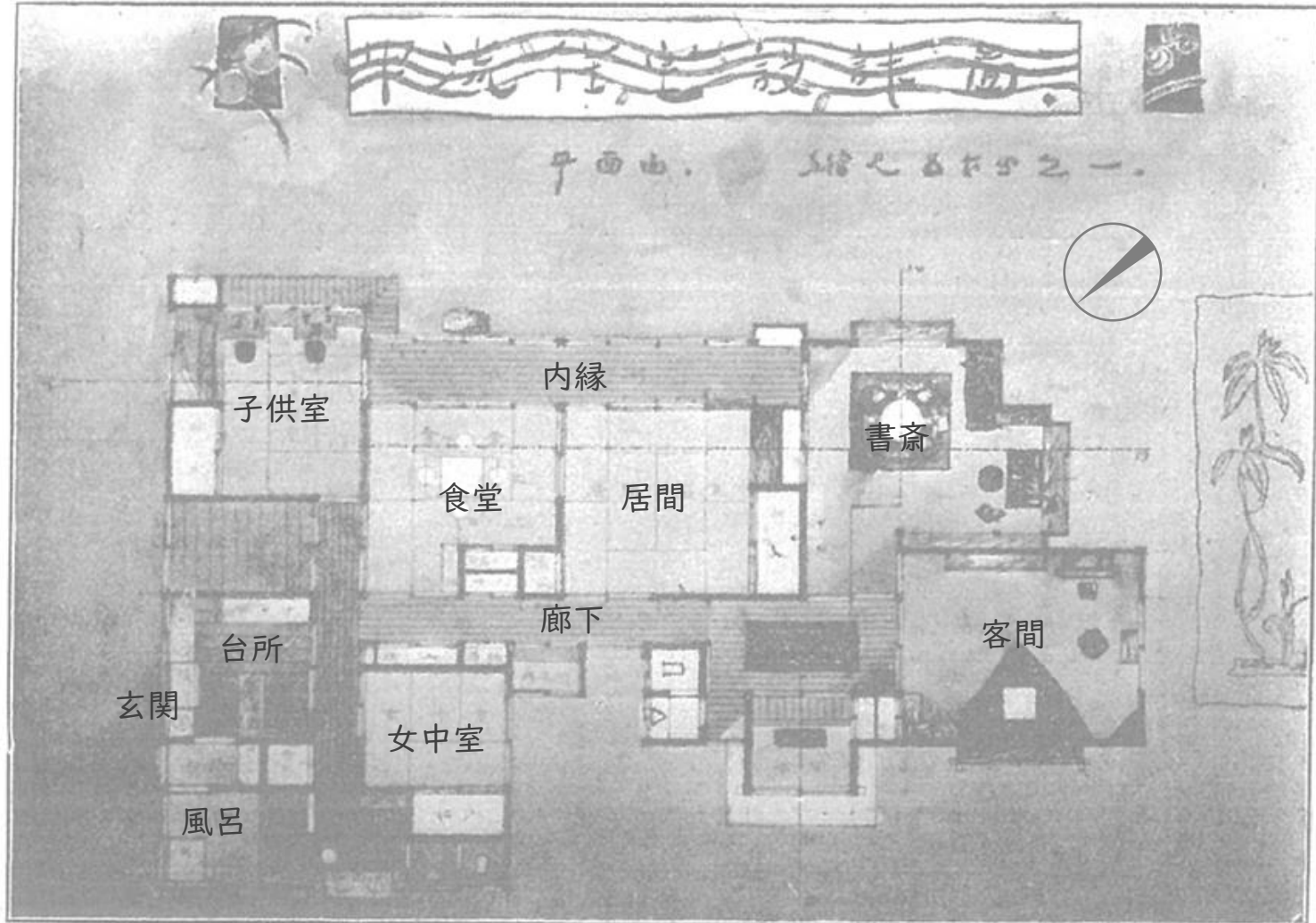
VI_色の調和：「なるべく原色でない色が住家としての目的に適応している」。ただし、客間や食堂は「華麗、奇抜、あるいは軽快な色彩」を用いてもよい。書斎は「精神の平静を要する場所」なので、「どっしりした感じの色」がよい。寝室は「落ち着いた色」がよい。

VII_米飯的住家と牛肉的住家

 先行研究で触れられていない
注目に値する考え方

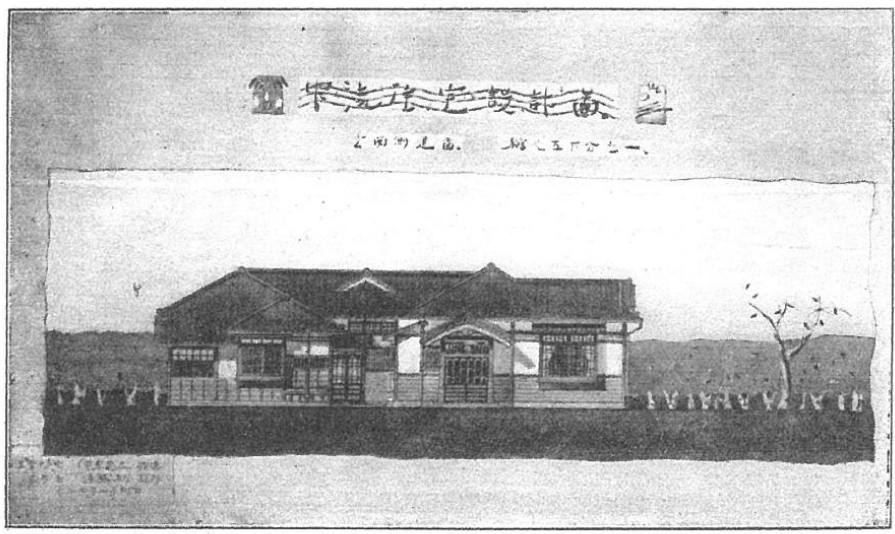
青字語句：内田青蔵による引用語句
黒字語句：引用されていない部分

■ 家庭博覧会（大正4年）に出品した伊東忠太設計の「中流住宅」

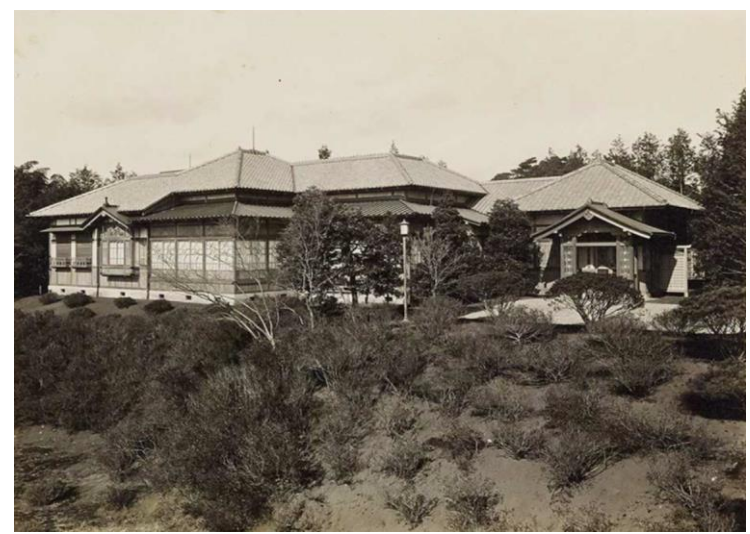


平面図

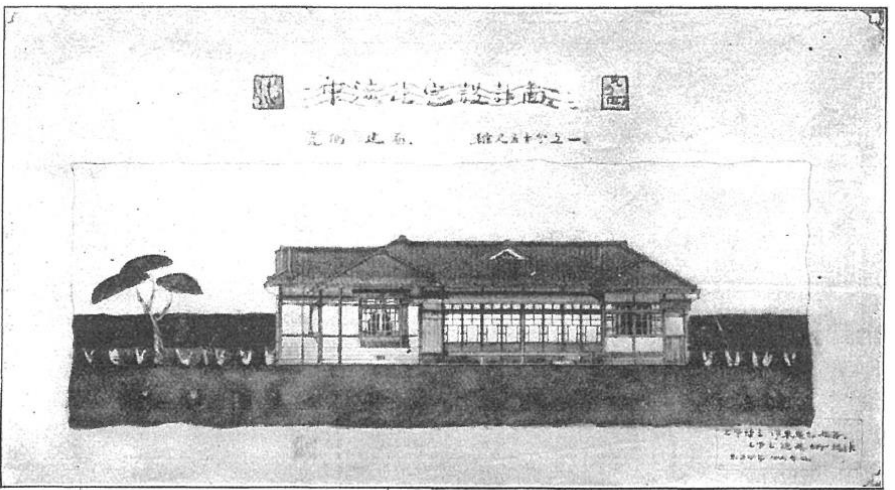
■ 家庭博覧会（大正4年）に出品した伊東忠太設計の「中流住宅」立面と「荻外荘」



玄関側立面図



外観写真

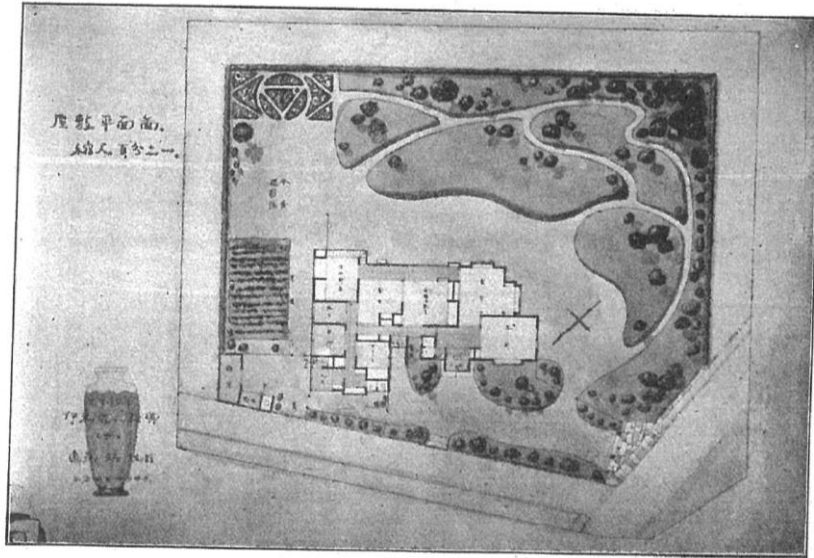


庭側立面図

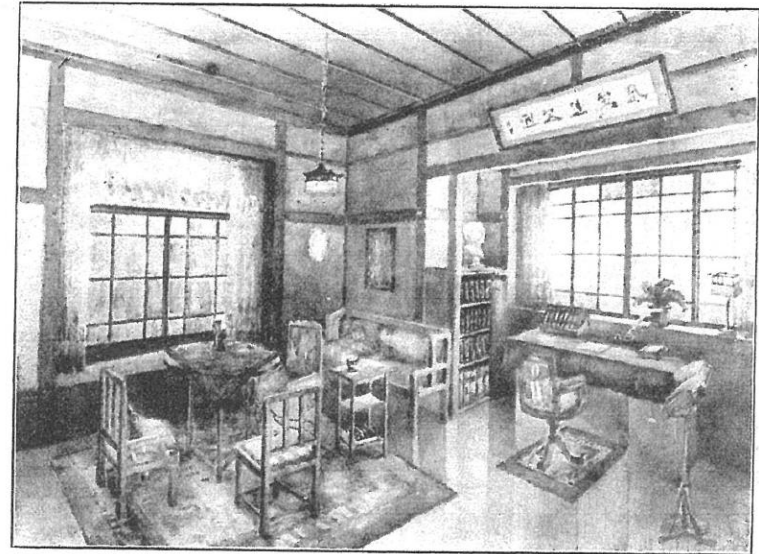


外観写真

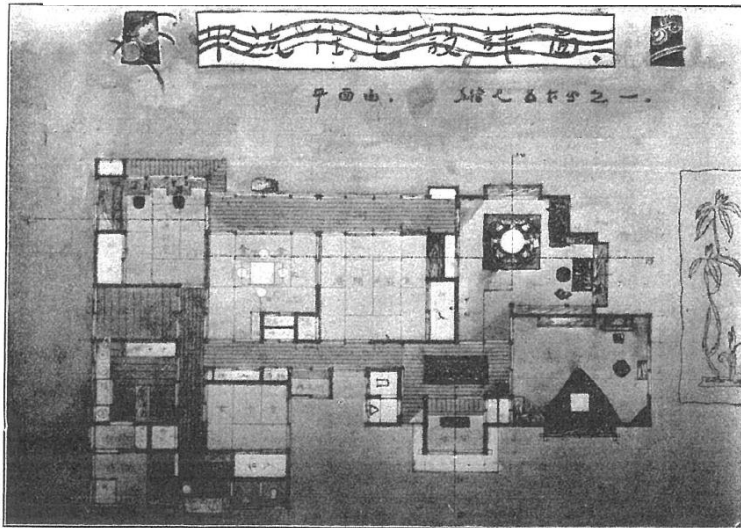
■ 家庭博覧会（大正4年）に出品した伊東忠太設計の「中流住宅」



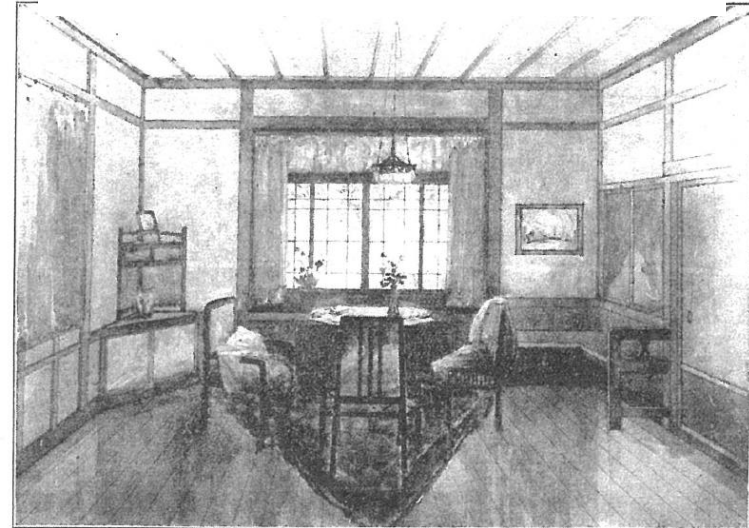
平面図



書斎



平面図



応接室

6_伊東忠太の住宅観と「荻外荘」

■ 伊東忠太の住宅観 ②

『婦人之友』大正5年8月号に掲載された設計論「中流の住宅は如何に設計すべきか」

I_儀式本位の家、家族本位の家：これからの住宅は儀式本位を去って家族本位

II_真の良い建築：

- ・ 住む人の身分に相応したもの
- ・ 便利を主としたもの
- ・ 間取りの具合から設備に工夫を凝らしたもの
- ・ 「住宅は恰も着物のようなもの」
 - 良い着物：その人に相応しい柄、衿丈、立居に便利、辻褃のあったもの
 - 良い建築：住む人に相応しい柄、材料は質素、辻褃があったもの
- ・ 間取りを主とし、質素簡朴に。

III_間取りの方針および配置：

- ・ 間取りの具合は敷地の関係、家族の多少、主人の職業、富の程度、交際の広狭により千差万別。
- ・ 標準でなく、一般の方針は次頁の通り。

6_伊東忠太の住宅観と「荻外荘」

- 一 間取りはどこまでも緊縮した形
- 二 極力工費節約のため縁側や廊下は少なくする
- 三 室と室との連絡はどこまでも容易に。縁側や廊下も適度に必要
- 四 各室の秘密を保ちうること。着替え等のため他から見透かされない隠れ場所が必要
- 五 各室とも充分に光線が入り、通風の良いこと
- 六 物入れの場所を多く設ける
- 七 壁の領分を多くし、建具の領分を少なくした方が構造上丈夫
- 八 中流以上の住宅なら、各種の部分を大体区画することが必要
 家族用、客用、台所に関する部分→三大部、
 間取りの「有機的組織」に配置→全体の統一感

IV_住宅の表情

- ・「外から見た家の体裁格好は昔から余り考えられなかった」
 →「大工に一定の型があって、ほとんど千篇一律」
 「間取り具合や設備等ばかり指図して外形は大工に任せきり」にするので「外からみた気分は少しの表情も風情も」ない。
- ・家の外観にも表情があるはず。「主人の性格趣味が表れなければ面白」くない。



先行研究で触れられていない
 注目に値する考え方

青字語句：青木正夫による引用語句

黒字語句：引用されていない部分

6_伊東忠太の住宅観と「荻外荘」

V_建具も閑却すべからず

・建具もあらかじめ一考を要するもの。「始めから別に予算をとって置いて、その家相当のものを使いたい」。「構造」や「意匠」についても、硝子の利用や雨戸の改良を加えるだけでなく、襖についても「室に応じて模様を替える」などの工夫が必要。

VI_部屋の特別な色と形

- ・色と形の配合が大切。
- ・壁の色、柱の色、畳襖の色合い→色彩の調和が必要
- ・細かく言うと、床の軸物置物、床板座布団と畳、火鉢や茶器
- ・「形の調和」：第一に室の大きさと天井の高さ、柱の大きさと長押の幅、床の広さと深さ、床と棚の関係、および棚の配置、障子の腰、

VII_住宅は一代きりです

- ・将来の建て増し模様替えを予期、融通が聞くように設計する。
- ・「住宅は衣食住のうちでも「衣物（きもの）」に近い性質のもの」
この記載は設計者と大工の役割を示唆する点で注目に値する。

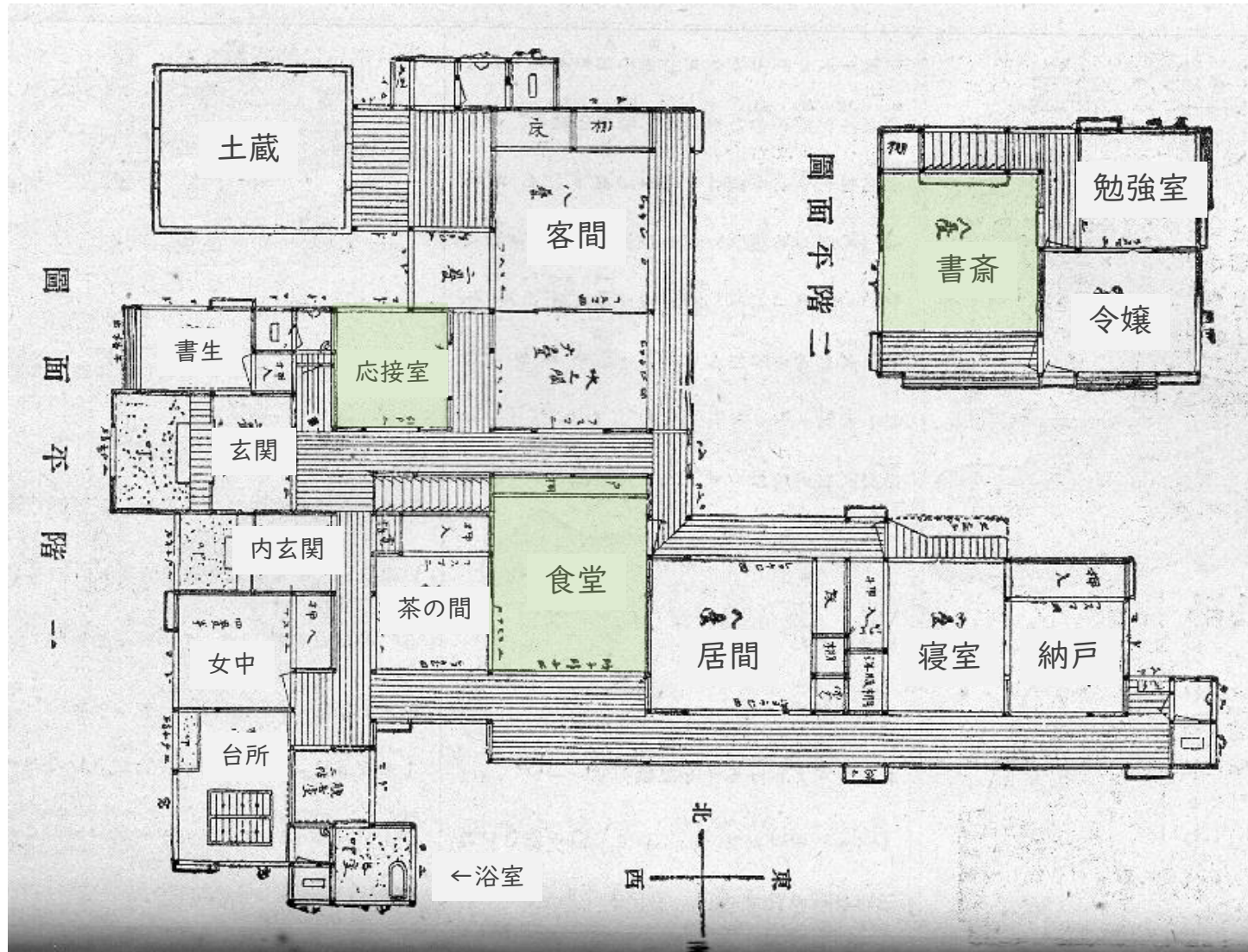


先行研究で触れられていない
注目に値する考え方

青字語句：青木正夫による引用語句

黒字語句：引用されていない部分

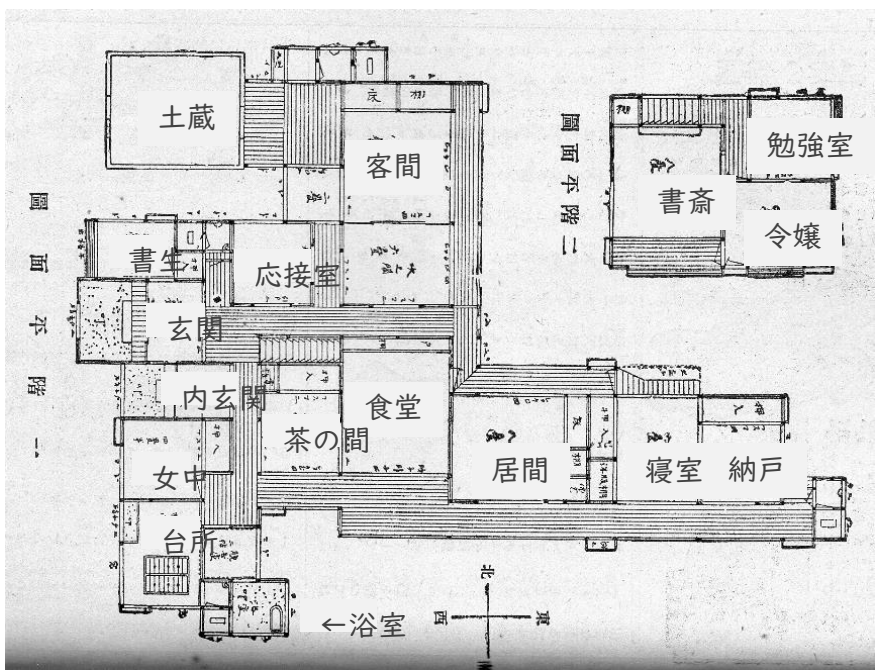
■ 伊東忠太の住宅観 ②



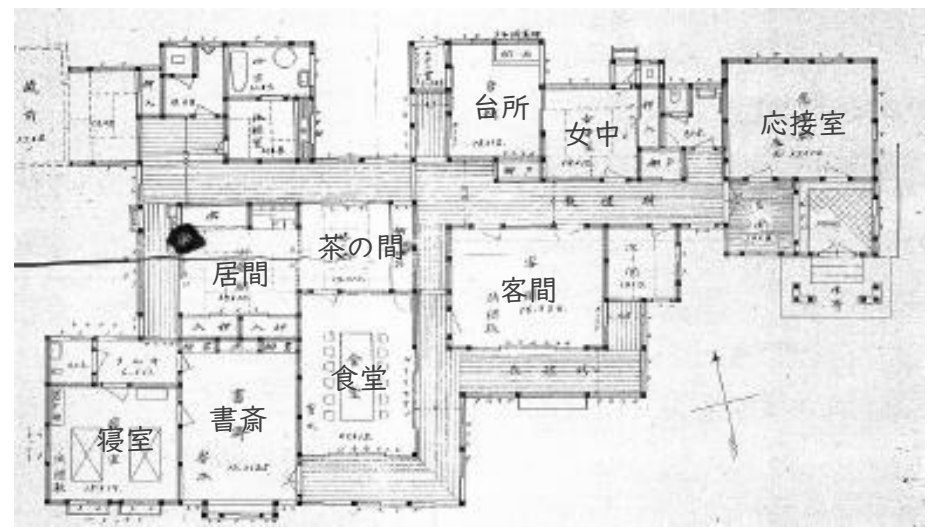
『主婦之友』大正5年8月号に掲載された伊東忠太自邸の平面図

6_伊東忠太の住宅観と「荻外荘」

■ 伊東忠太自邸と「荻外荘」の平面図



『主婦之友』大正5年8月号に掲載された伊東忠太自邸の平面図



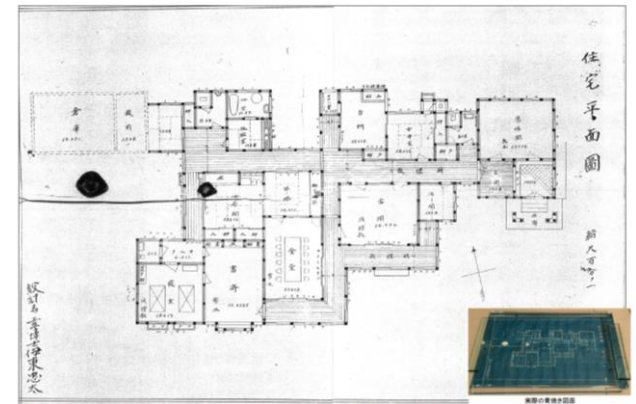
「荻外荘」創建時平面図

■ 伊東忠太による中流住宅設計方法と「荻外荘」の特徴

伊東忠太の中流住宅設計手法（『婦人之友』大正5年8月号）にみられる評価項目一覧表

No	評価項目	具体的な評価項目	該当種別	該当有無
1	家族本位	日当たりがよく、展望がよい部分を家族の住まいにあてる	D	○
2		子供部屋をなるべくよい位置にする	-	-
3		「一家生命の源たる」大事な台所を優遇する		×
4		湯殿や便所も一層注意する		○
5		(客間は第二の位置でよい)		×
6		(応接間に一番悪い位置を当てても「我慢できなくはない」)		○
7	真の良い建築	住む人の身分に相応したもの	C, D	○
8		便利を主としたもの	A, B	○
9		間取りの具合から設備に工夫を凝らしたもの		
10		「住宅は恰も着物のようなもの」		
11		間取りを主とし、質素簡朴にする		
12	間取の方針	間取りはどこまでも緊縮した形		
13		極力工費節約のため縁側や廊下は少なくする		
14		室と室との連絡はどこまでも容易に。縁側や廊下も適度に必要。	A	○
15		各室の秘密を保ちうること。着替え等のため他から見透かされない隠れ場所が必要		
16		各室とも充分に光線が入り、通風のよいこと	I, L, M, O	○
17		物入れの場所を多く設ける		
18		壁の領分を多くし、建具の領分を少なくした方が構造上丈夫。	E	○
19		中流以上の住宅なら、各種の部分を大体区画することが必要。	B	○
20	住宅の表情	主人の性格趣味が表れている	F, G, I	○
21	建具	その家相当のものが採用されている	L	○
22	部屋の色と形	色と形の配合が大切		
23		壁、柱、畳、襖の色彩の調和がとれている		
24		床の軸物・置物、床板座布団と畳、火鉢や茶器		
25		室の大きさと天井の高さ		
26		柱の大きさと長押の幅		
27		床の広さと深さ		
28		床と棚の関係		
29		棚の配置		

記号	対象	「荻外荘」の特徴	根拠
A	プラン	各部屋が廊下で結ばれている	図面
B	プラン	廊下によって部屋の用途毎のまとまりが区画されている（家族用、客用、水廻り）	図面
C	プラン	家族用のスペースと比較して客用スペースが大きい	図面
D	プラン	家族用諸室（寝室、書斎、食堂）と客間が南面の良い場所に配置されている	図面
E	プラン	柱が非常に多く、柱間の両端に幅の小さな壁を記している	図面
F	敷地	外観は和風の平屋であり、斜面を上った台地に建てられている	写真
G	外観	部屋の違いを外観から伺い知ることができ、雁行した建屋になっている	写真
H	外観	玄関は懸魚付き切妻屋根の妻入り	写真
I	応接間	中国風であり、螺鈿の家具、山水の掛け軸、天井に龍の絵画、床に龍の敷瓦	写真
J	客間	板敷絨毯敷で椅子式。小壁部分に動物をモチーフにした内装	写真
K	食堂	寄木造りで椅子式。腰壁が配されている。	写真
L	食堂	天井が高く、南に硝子窓を用いており、採光に工夫がみられる	写真
M	茶の間	畳敷（8帖）で造り付けの棚がある	写真
N	居間	畳敷（10帖）で、駆込付書院、床の間、違い棚のある書院造り	写真
O	寝室	板敷に絨毯敷で寝具にベッドを使用している	写真
P	書斎	板敷、腰壁付きで造り付けの棚があり、天井が高い	写真



6_伊東忠太の住宅観と「荻外荘」

■ まとめ 「荻外荘」における伊東忠太のエッセンス

・ 建築主の生活に合わせたプランニング：

寝室、書斎、食堂の家族用スペースを南向きの良い場所に配置する（家族本位）だけでなく、客間の接客用スペースにも良い場所を与えている

・ 住み手の動線計画に配慮したプランニング：

各部屋のアクセスを容易にするよう、廊下でつないでいる

・ 「採光」に配慮したプランニングと立面計画：

部屋を雁行させている。鴨居を高く設置している。小壁の窓を利用している。

・ 耐震性に配慮したプランニング：

開き戸を上手く配置し、L字形の幅の小さな壁ができるように計画されている。

・ 建築主の性格や趣味に配慮した設計計画：

中国風の応接間、書斎の外観、鴨居の高さ、眺望の確保、客間への配慮

大正から昭和初期にかけて、生活を改善していこうとする流れが活発化するなかで、「荻外荘」の床敷（椅子式）と畳敷（床式）が混在する様式は、椅子式の洋風の生活を理想としながらも、慣習的な和風の生活が残ることを許容した伊東忠太の折衷的住宅観が反映された様式だと考えられる。さらに、プランニングを重視しながらも、採光や建築主の趣味（要望）に配慮している点にも伊東忠太らしさが表れていると考えられる。